

相手との関係性から捉えた間接的攻撃言動表出と心情

大 和 美 季 子* ・ 吉 岡 和 子**

本研究では、相手との関係性において間接的攻撃言動表出と心情がどのように変化するのかについて、理不尽な場面を設定し検討した。大学2・3年生に質問紙を行った結果、間接的攻撃言動尺度については、「想像」「露骨」「態度」の3因子、嫌いな相手に対する「本音を伝えなかった理由」については、「関係配慮」「関係回避」という2因子が見出された。好きな相手に対してよりも、嫌いな相手に対しての方が、間接的攻撃言動や、怒り・不満が表出されやすく、また、理不尽な状況では、相手に本音を伝えることで自分に不利益が及ぶことを避ける為に本音を伝えず、また相手の気持ちを考慮し発言を抑えることは少なくなることが分かった。好きな相手に対しては、関係を配慮し相手の気持ちを考え、なるべく攻撃的にならないように配慮をするが、嫌いな相手に対しては、好きな相手に対してよりも、怒りや不満を感じる為、直接的な攻撃ではなく、間接的な攻撃を用いて、本音を自分に不都合が及ばない形で伝えるのではないかと考えられた。

問題と目的

人間関係が希薄化の状態にあるといわれて久しいが、その希薄化を加速させた要因の1つとして、白井(2006)は電子メールや携帯電話の普及など、非対面的なコミュニケーションがあるのではないかと、述べている。近年ではインターネットにおいて、ブログや、mixi・Facebook等のさまざまなソーシャル・ネットワークワーキング・サービス(SNS)を利用する者が年々増加している。総務省が2009年に発表した調査報告書によれば、2005年3月時点のブログ登録者は335万人、SNS登録者111万人であったのに対し、2006年3月時点では、ブログ登録者は868万人、SNS登録者716万人と、1年でその数を大幅に増やしている。このように他者と繋がるためにブログやSNSを利用する一方で、それらの書き込みが原因で対人トラブルになることも少なくない。総務省(2009)の調査によると、ブログ上で自分の人格に対して誹謗中傷を受けた経験があると回答した者は、3.4パーセント以上にのぼっており、中には「ブログ炎上」と呼ばれる事態になる

ことがわかっている。対象者のブログが、民事・刑事的に名誉棄損にすら該当する批判的な書き込みで溢れかえり(板倉,2006)、また、記事を読んだ人間が「ネットストーカー」と化すこともある(井出,2006)。

また、こうしたインターネット上のコミュニケーションツールを利用した「ネット上のいじめ」も近年注目を浴びている。具体的ないじめの内容としては、「被害者の持っているブログに誹謗中傷を書き込む・インターネット上の掲示板等に個人情報を掲載する」といったものから、「被害者になりすましてブログ等を作成し、インターネット上で活動する・クラスの大勢になりすまし、被害者に何十通もメールを送信する」といった悪質極まりないものまで様々であり、さらには、被害者の写真や電話番号がインターネットの掲示板やブログ等に掲載されたことで、それらが流出し、第三者によって悪用されるというように、加害者と被害者の間だけでの問題ではなくなってくるケースもある(文部科学省,2008)。文部科学省が2012年に発表した調査では、2010年度のいじめの認知件数77630件

*心のクリニック・飯塚 臨床心理士

**福岡県立大学大学院 人間社会学研究科 心理臨床専攻 准教授

のうち、3.9パーセントが「パソコンや携帯電話等で、誹謗中傷や嫌なことをされた経験がある」と回答しており、さらに高校生だけを見ると、14.9パーセントまでその数を伸ばしている。これは、小学生の携帯電話所持率が約26パーセント、中学生の携帯電話所持率が約50パーセントなのに対し、高校生では94パーセントを超える（ベネッセ,2009）ため、高校生で「パソコンや携帯電話等で、誹謗中傷や嫌なことをされた経験がある」と回答した割合が増えたのだと考える。また、同調査によると、小中学生の携帯電話所持率は増加傾向にあるといわれている為、今後さらに、「ネット上のいじめ」が増加していくのではないかと考えられる。

気にいらぬ相手に対し、直接自分の意見を言ったり気持ちを伝えたりすることが可能な状況であるのにも関わらず、インターネットツールを用いて相手を批判したり攻撃したりする方法は、非常に遠回しかつ間接的であると言える。また、掲示板に相手の誹謗中傷を書き込む、相手の個人情報等を特定する等の行為は、対象者の気付きにくいところで対象者を追い込んでいくものであり、こちらも遠まわして間接的な攻撃行動である。そして、攻撃する際にインターネットツールを用いる場合、匿名を使うことにより攻撃しているのが誰か分からなくすることが可能であり、自分が逆に傷つけられたり相手に嫌われたりするリスクを背負わないで、相手に嫌な思いをさせることが可能である。そして、対象者に対する攻撃性は伝わるが、「対象者のどういうところにどういう感情を抱き、その結果こうした攻撃に繋がった」という流れが対象者には伝わりにくい為、非常に遠回しな攻撃の表現方法だと言える。

インターネット上だけでなく、学校などで起こる現実世界のいじめにおいても、間接的な攻撃は見られている。小田部・加藤（2007）の調査によると、友人から受けたいじめ行為において、殴る、蹴る、相手をからかうといった身体的、言語的に直接相手に向けて行う直接的な攻撃よりも、相手の悪い噂を流す、仲間外れにするといった人間同士の関係性を利用した間接的な攻撃の方が、男女ともに多く経験していることが分かっている。さらに同調査では、男女ともに、直接的な攻撃を受けた時よりも間接的な攻撃を受けた時の方が傷つきの程度が高かった。

間接的攻撃とは、「攻撃が遠回しで、間接的な攻撃」（秦,1990）と定義される、他者に対する攻撃である。また、勝間・山崎（2008）は「加害者の意図が分か

らないような方法をとる」攻撃であると定義し、間接的攻撃には他者を社会的に排除する、または操作する性質があると述べている。これらのことから、対人関係において間接的攻撃を使うことで、攻撃が間接的で遠回しになり、こちらがはっきりと口に出して言わなくても、表情や態度、言い方など非言語的な表現でこちらの不満の背景にある言いたいことや期待・願いを相手に悟ってもらい、相手に動いてもらおうという目的があると考えられる。また、間接的、遠回しに表現することで、相手がそれに対し悪意を感じたとしても相手は確証が持てない上、「そんなつもりでは無い」という様に言い逃れることも可能である。加えて、日本では社会的場面において相手に対し嫌悪を抑制しやすい（中村,1991）ことから、対面場面で嫌悪を抑制しなければならぬ人にとって、間接的攻撃は相手への嫌悪感を直接的ではなく、社会的な体面が守られる形で表出することができる上に、相手に対する嫌悪が確証の持てない形で伝えられるため、対人関係において用いられやすいのではないだろうか。

従来の研究では、間接的攻撃を測るものとして秦（1990）の「敵意攻撃インベントリー」内の「間接的攻撃」因子があるが、これは、「いやなことを頼まれたら、いいかげんなやりかたをすることが多い」というように、その場面に対しての行動がすでに得かれており、1つの場面における多様な間接的攻撃の言動をみることは出来ない。その為、今回は「間接的攻撃言動」尺度を作成し、間接的攻撃にはどのような種類があるのかを分類することにした。そして今回は攻撃性を表出しやすくするため、自分に非が無いのにも関わらず理不尽な目にあうという場面を設定して調査を行う。

青年期は依存の対象であった親から離れ、新たな関係を求める時期であり、受動的で与えられた関係ではなく、自ら能動的に形成する対等で主体的な対人関係を求めていくと言われている（山岸,1990）。牧野（2012）は、青年期において友人関係がうまく形成・維持されれば、重要なサポート源となって社会集団を形成するものであるが、その関係が悪化したり形成されなかったりすると、対人関係の大きな問題となり、ストレスの原因になると述べている。大学生の友人関係において、気を遣いすぎてつかれてしまう、仲が良いが本音が言えない、という友人関係の悩みを抱える者が少なくない（吉岡・高橋,2010）。また吉岡・高橋（2010）は、携帯電話などの顔の見えないコミュニケーションや、実際に顔を合わせて話をしていても、友人の気持ちを汲み取ることや「空気を読むこと」が

求められ、気疲れしてしまうのではないかと述べている。

依存の対象が母親から友人に変わる青年期において、友人関係を壊すことなく上手く維持していくことは非常に大切なことであり、それ故に相手の気持ちを汲み取ったり空気を読んだりしようと、気を遣いすぎてしまうといった悩みが出てくるのだろうと考える。「空気を読む」という言葉にもあるように、その場で相手がどういうことを求めているのか、状況的に自分がどう動いたら良いのかを察知できる能力が重要とされる。大石（2011）の研究でも、「空気が読めない人」に対して、周りは我慢するしかないため迷惑に思っており、結果的に「空気が読めない人」を嫌いになると述べられている。そして、空気が読めないことで嫌われないように、その場で相手がどういうことを求めているのか、状況的に自分がどう動いたら良いのかを推察する能力をほとんどの人が身に付けるため、直接要求を伝えなくても察振りさえ見せれば、周りが察知してくれるということが起こりやすいと言える。そのため、対人関係が重要視される青年期において、相手の行動に対して不信感を持った場合、そのことを相手に直接伝えなくても自分の言いたいことを察してくれることが多い間接的攻撃は学習されやすく、そして対人関係での表現方法として間接的攻撃を使う人も多いのではないだろうかと考え、今回は、青年期を対象に調査を行うこととした。

以上のことから、相手との関係性により、理不尽な場面における間接的攻撃言動の表出と心情を検討することにより、間接的攻撃が行われやすいいじめ（ネット上のいじめを含む）のプロセスを考える一助にすることを本研究の目的とする。

仮説

1. いじめにおいて間接的攻撃がみられることから、理不尽な状況においても、好きな相手に対してよりも嫌いな相手に対しての方が、間接的攻撃言動は表出されやすいのではないかと。
2. 本音を伝えなかった理由としては、好きな相手に対してでは、今後の関係のことも考える為、相手に対して配慮がみられるが、嫌いな相手では、すでに相手との関係が悪い為、今後の関係を考慮に入れることが好きな相手に対してよりは少なくなるのではないかと。それ故、好きな相手に対してよりも、相手に対しての配慮が見られにくいと考えた。
3. 「相手に抱く感情」「相手の行動に対する不信感」

においても、好意が無い分、嫌いな相手に対しての方が、好きな相手に対してよりも負の感情や不信感を強く感じるのではないかと。また、「思っていることが顔に出る」という言葉にもあるように、表情には思考が反映されやすいと考える為、「相手に向ける表情」についても、嫌いな相手に対しての方が、好きな相手にたいしてよりも硬くなるのではないかと考える。

4. 嫌いな相手に対しての方が、怒りや不満、悲しみという負の感情が湧くので、その分、相手に対して思うことや、実際に伝えることもきつい口調になりやすいのではないかと。

方法

予備調査1

目的：理不尽場面における間接的攻撃言動を測定する尺度項目を作成する為に行った。

対象者：大学院生及び20代の社会人10名

結果：自由記述の結果を整理し、項目を作成した。

予備調査2

目的：予備調査1で作成した「理不尽場面における間接的攻撃言動」を測定する尺度項目の検討及び「本音を伝えない理由」の項目を作成する為に行った。

対象者：大学院生10名

結果：理不尽場面における間接的攻撃言動を測定する尺度項目の、さらにわかりにくい項目について、より質問の意図が伝わりやすいように加筆修正した。また、「本音を伝えない理由」を自由記述の形式で書いてもらい、その理由をKJ法で分類し、「本音を伝えない理由」尺度（13項目）を作成した。

本調査

1. 調査時期と対象者

2012年の11月中旬に、大学2・3年生60名に質問紙調査を実施した。授業中に質問紙を配布し、授業後に回収した。

2. 調査内容

1) 間接的攻撃

森（1990）の敵意的攻撃インベントリ尺度から、「間接的攻撃」の尺度である10項目を使用した。「以下の質問に対し、あなたの気持ちに一番近いものに○をつけて下さい。」という教示のもと、5件法（「そうだ（1点）」「少しそうだ（2点）」「どちらともいえない（3点）」「少しちがう（4点）」「ちがう（5点）」）で回

答を求めた。

2) 理不尽場面における間接的攻撃言動 (特性)

予備調査2で作成した、理不尽な場面において、間接的攻撃言動をとるかどうかをたずねる尺度である。特性をたずねる際には、「友人関係において、理不尽なことをされた際、あなたはその相手に対して、以下の態度をとることがありますか。」という教示のもと、「全くとらない (1点)」「あまりとらない (2点)」「どちらともいえない (3点)」「たびたびとる (4点)」「ほとんど、いつもとる (5点)」までの5件法を用いた。なお、注意書きとして、理不尽という言葉の意味も添えた。

3) 場面の設定

相手との関係性による反応の違いを検討するために、対人葛藤場面のエピソード1 (渡部,1993) を参考に場面を設定した。

教示は「あなたとA (B) さんはサークルの当番なので、外にゴミを捨てに行かねばなりません。でも外は雨が降っており、あなたもA (B) さんも「外に行きたくないなあ」と思っています。そのときA (B) さんが「1人でゴミ捨てに行ってきた」と言い出しました。その為、あなたはゴミ捨てに一人で行かなくてはなくなりました。」で、教示を読んでもらってから、回答を求めた。

AさんとBさんとの関係はそれぞれ、「人として好き」「嫌い」となっていて、質問紙の間4ではAさんを、間5ではBさんのことを考えながら質問に答えてもらう形式となっている。なお順序効果を防ぐために、質問紙の半数は、好きな相手と嫌いな相手に対する回答の順番が入れ替わっている。

次の、1)~7) について、それぞれ好きな相手、嫌いな相手だった場合をイメージしてもらいながら回答してもらった。

- 1) 図1の吹き出しに、相手に対して心の中でどんなことを思うか、を書いてもらう。(図1)



図1 相手に対して心の中でどんなことを思うかを記入する吹き出し

- 2) 図2の吹き出しに、実際に相手に伝えることを書いてもらう。(図2)

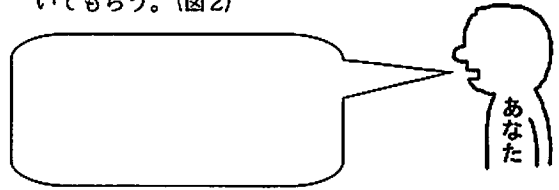


図2 実際に相手に伝えることを記入する吹き出し

- 3) 1) と 2) の吹き出しの内容が違った人に対し、予備調査2で作成した「本音を伝えなかった理由」を問う項目、13項目に回答を求めた。
- 4) この状況で相手に対し「怒り」「不満」「悲しみ」をどの程度感じるかを、7件法 (「全く感じない (1点)」「感じない (2点)」「やや感じない (3点)」「どちらともいえない (4点)」「やや感じる (5点)」「感じる (6点)」「非常に強く感じる (7点)」) で回答を求めた。
- 5) 相手が嫌がらせて言ったのだと思うかをそれぞれ7件法 (「全くそう思わない (1点)」「そう思わない (2点)」「ややそう思わない (3点)」「どちらともいえない (4点)」「ややそう思う (5点)」「そう思う (6点)」「きっとそうだと思う (7点)」) で回答を求めた。紺・相澤 (2011) が、対人葛藤場面における「敵意帰属」を測るために設けていた項目を利用した。
- 6) 相手に対して向ける表情に一番近いものを丸で囲んでもらう (図3)。これについては、石井 (2004) が作成した表情画評定尺度の1つである hard-soft の尺度を使用した。



図3 相手に向ける表情の選択肢

- 7) 理不尽場面における間接的攻撃言動 (状態)

その場面が実際におこった際に、予備調査2で作成した、理不尽場面における間接的攻撃言動尺度に書かれている態度をとるかどうかを、「絶対とらないと思う (1点)」「とらないと思う (2点)」「どちらともいえない (3点)」「とるだろうと思う (4点)」「絶対とると思う (5点)」の5件法で回答を求めた。

結果

1. 間接的攻撃言動尺度の妥当性の検討

1) 間接的攻撃言動尺度についての分析

主成分分析を行ったところ、2~3因子が妥当であると判断した。そこで、4種類の因子分析を行い、そ

相手との関係性から捉えた間接的攻撃言動表出と心情

それぞれ.35未満の値を示す項目については削除をした結果、解釈可能性から、重み付けの無い最小2乗法（プロマックス回転）による全15項目、3因子を抽出した（累積寄与率=51.18%）。信頼性係数は、第1因子から順に α =.85, .72, .75で、15項目全体での信頼性係数は α =.83であった。その結果を表1に示す。

第1因子は、「嫌をほのめかす」「無愛想になる」等の4項目で構成されていた。相手に対する攻撃性は他の因子に比べて低いが、相手にこちらの意図を想像させることで、相手の言動を抑制しようとする狙いが見られるので、「想像」と名付けた。

第2因子には、「無視をする」「馬鹿にした態度をとる」等の6項目で成り立っており、直接相手に対して不満に思う気持ちを述べてはいないが、相手への攻撃という面で見ると、露骨なまでに分かりやすい項目が集まっている。そのため、第2因子は「露骨」とした。

第3因子は、「にらむ」「大きな音が立つように扉を閉める」「返事をするときを声を荒げる」等の5項目であった。音や声の抑揚、目の動き等の非言語で相手に対しアクションを仕掛けている為、第3因子は「態度」と名付けた。

表1 「間接的攻撃言動尺度」の因子分析の結果

		因子		
		1	2	3
因子1	11. 不愛想になる	.91	-.05	-.08
想像	12. 不機嫌になる	.86	-.13	.01
	1. 「嫌」をほのめかす	.79	-.06	-.08
	2. 煮え切らない態度をとる	.60	.04	-.06
因子2	15. 馬鹿にしたような態度をとる	-.10	.81	-.07
露骨	7. 鼻で笑う	-.17	.79	-.24
	17. 皮肉を言う	.13	.44	.16
	4. 無視をする	.24	.43	.06
	6. 舌打ちをする	-.07	.42	.04
	13. 聞こえない振りをする	.25	.40	.15
因子3	8. 大きな音が立つように扉を閉める	.01	-.18	.93
態度	9. いつもより大きな足音を立てる	-.13	-.14	.87
	10. 返事をするときを声を荒げる	-.04	.17	.54
	5. にらむ	-.13	.30	.39
	18. ため息をつく	.05	.28	.37
	3. 相手の話をそらす	.14	.30	.26
	14. 「えっ？」とわざと聞く	.12	.27	.25
	16. 目を合わせない	.25	.26	.11
因子間相関				
		因子1	.30	.53
		因子2		.37

2) 間接的攻撃インベントリー尺度との相関分析

予備調査2で作成した間接的攻撃言動尺度の妥当性を確認するために、秦（1990）の敵意的攻撃インベントリー尺度の間接的攻撃因子と、間接的攻撃言動尺度について相関分析を行った。

まず、秦の間接的攻撃因子の総和と、間接的攻撃言動尺度の総和でPearsonの積率相関係数を求めた結果、 $r=-.438$ で中程度の有意な相関が見られ（ $p<.01$ ）、間接的攻撃の一側面を測定できているものと考えられる。

3) 相手に本音を伝えなかった理由

調査内容を考慮して、嫌いな相手に対する「本音を伝えなかった理由」について、因子分析を行った。また、好きな相手との比較を行うことを考え、「嫌いな人だから」(好きな相手の場合は「好きな人だから」)という項目を除いて分析を行うこととした。

主成分分析を行ったところ、2因子が妥当であると

判断した。そこで、4種類の因子分析を行い、それぞれ.40未満の値を示す項目については削除をした結果、解釈可能性から、重み付けの無い最小2乗法(バリマックス回転)による全11項目、2因子を抽出した(累積寄与率=49.04%)。信頼性係数は、第1因子は $\alpha = .79$ 、第2因子は $\alpha = .73$ であった。その結果を表2に示す。

表2 「本音を伝えなかった理由」の因子分析の結果

		因子	
		1	2
因子1	1. 相手を傷つけない。	.80	-.47
関係	11. 相手からの評価を良くしたいから。	.76	-.16
配慮	4. 相手からの、評価を悪くしたくないから。	.71	-.15
	9. 嫌だということを、悟られたくないから。	.57	-.004
	5. 自分がそう思ったこと自体が、間違っているのかもしれないから。	.49	.11
	6. 柔らかい表現で、本音を伝えたいから。	.45	.01
因子2	8. 合理的に考えて、その方が早いと思ったから。	-.17	.75
関係	7. わざわざ伝えるほどのことでは無いと思ったから。	.16	.64
退避	10. 面倒くさいから。	-.03	.60
	12. 関わる時間を少なくしたいから。	-.16	.56
	13. トラブルになりたくないから。	.42	.48
	2. 相手を傷つけたい。	-.25	.21

第1因子は、「相手を傷つけないから」「柔らかい表現で本音を伝えたいから」等の6項目で構成されていた。相手の気持ちを考慮に入れ、相手との関係が悪くならないような配慮が見られることから、第1因子を「関係配慮」と名づけた。

第2因子は、「合理的に考えて、その方が早いと思ったから」「面倒くさいから」「トラブルになりたくないから」等の5項目であった。「関わりを少なくしたいから」という項目にも見えるとおり、相手の気持ちを考慮するというより、相手とのトラブルを避けるために合理的に考えて本音を伝えないという項目が集まっている。その為、第2因子は「関係退避」とした。

2. 相手との関係性における比較

1) 間接的攻撃言動

「理不尽状況における特性としての間接的攻撃言動のとりやすさ」「特定の理不尽状況における、好きな相手に対しての間接的攻撃言動のとりやすさ」「特定の理不尽状況における、嫌いな相手に対しての間接的

攻撃言動のとりやすさ」の3つの場面において、それぞれの因子の総和と15項目の総和ごとにFriedman検定を行った。

「想像」「露骨」「態度」の因子、15項目の総和全てにおいて有意な主効果が見られ(順に $\chi^2=21.86$, $df=2$, $p<.01$, $\chi^2=22.31$, $df=2$, $p<.01$, $\chi^2=10.11$, $df=2$, $p<.01$, $\chi^2=26.12$, $df=2$, $p<.01$)、多重比較をするためにWilcoxonの符号付き順位検定を行なった後、Bonferroniの不等式による修正をしたところ、「想像」「露骨」「態度」の因子と15項目の総和全てで、好きな相手に対しての方が、特性と嫌いな相手に対してよりも、得点が低くなることが分かった(「想像」どちらも $p<.01$ 、「露骨・好きな相手>特性」 $p<.01$ 、「露骨・好きな相手>嫌いな相手」 $p<.05$ 、「態度」どちらも $p<.05$ 「合計」どちらも $p<.01$)。また、「露骨」因子に関しては、特性と嫌いな相手に対しての間に有意傾向($p<.10$)が見られ、嫌いな相手に対しての方が、特性よりも得点が下がっていた。

多重比較の結果を図4~7に示す。

相手との関係性から捉えた間接的攻撃言動表出と心情

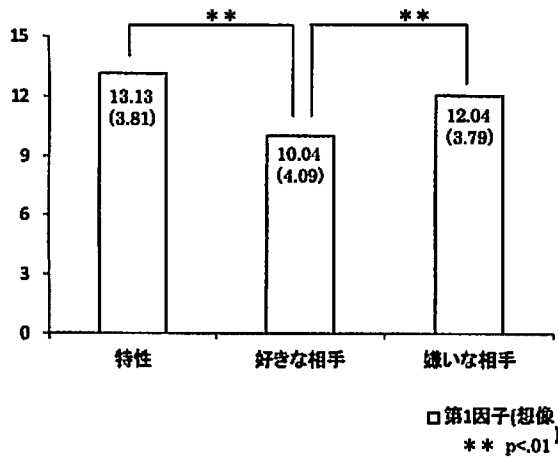


図4 相手との関係性における、間接的攻撃言動(想像)の比較 (n=54)

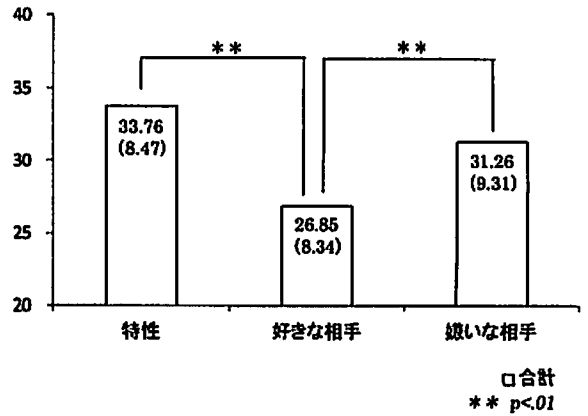


図7 相手との関係性における、間接的攻撃言動(合計)の比較 (n=54)

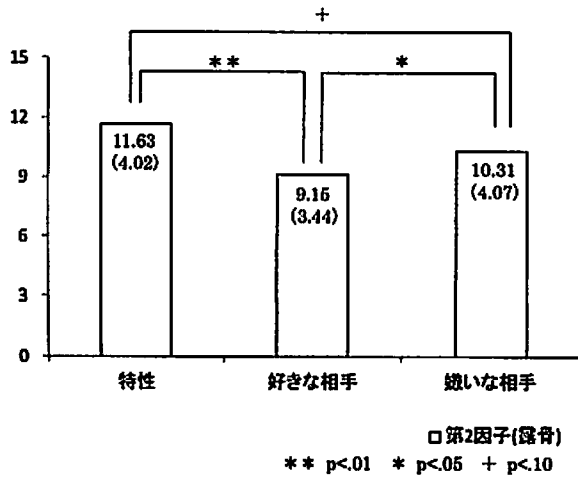


図5 相手との関係性における、間接的攻撃言動(露骨)の比較 (n=54)

2) 本音を伝えなかった理由

相手との関係性(相手のことが好き・相手のことが嫌い)において、「関係配慮」因子の総和と「関係退避」因子の総和ごとにWilcoxonの符号付き順位検定を行ったところ、「関係配慮」「関係退避」の因子どちらとも有意な差が見られ(順に $Z=-3.05, p<.01$, $Z=-2.86, p<.01$), 「関係配慮」の因子では、好きな相手に対しての方が嫌いな相手に対してより得点が低くなっていた。また、「関係退避」の因子では、嫌いな相手に対しての方が、好きな相手に対してより得点が低くなっていた(図8、9)。

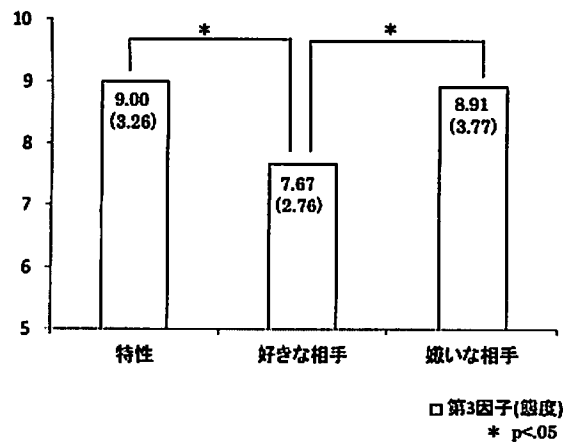


図6 相手との関係性における、間接的攻撃言動(態度)の比較 (n=54)

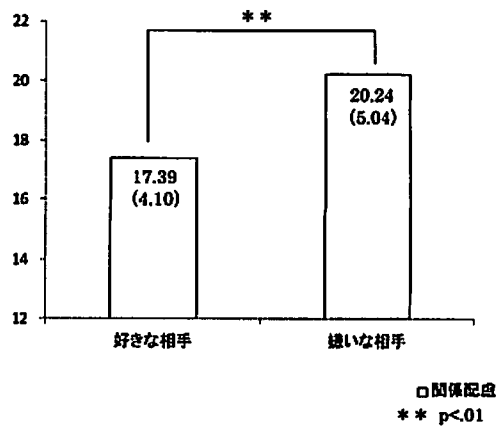


図8 相手との関係性における、本音を伝えなかった理由(関係配慮)の比較 (n=41)

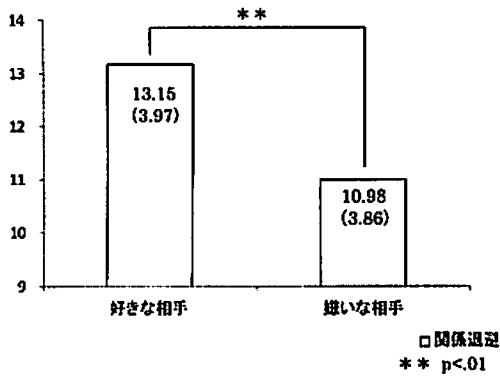


図9 相手との関係性における、本音を伝えなかった理由（関係退避）の比較（n=41）

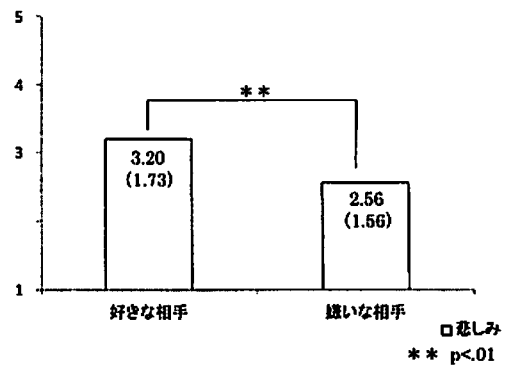


図12 相手との関係性における、相手に抱く感情（悲しみ）の比較（n=54）

3) 相手に抱く感情

相手との関係性（相手のことが好き・相手のことが嫌い）において、相手に覚える感情（怒り・不満・悲しみ）の項目ごとにWilcoxonの符号付き順位検定を行った（図10～12）。

怒り・不満・悲しみ全ての項目で有意差が見られ（ $Z=-5.02, p<.01, Z=-4.94, p<.01, Z=-2.78, p<.01$ ），怒りと不満は、嫌いな相手に対しての方が、好きな相手に対してより、その感情を覚えやすく、一方悲しみは、好きな相手に対しての方が、嫌いな相手に対してより、感じやすいという結果が出た。

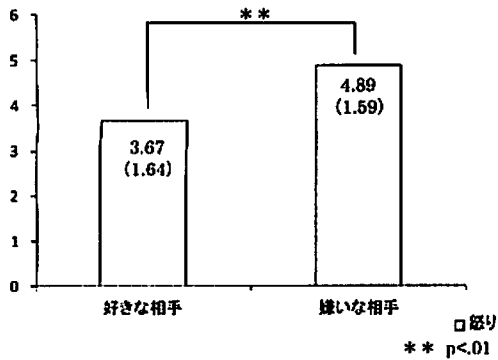


図10 相手との関係性における、相手に抱く感情（怒り）の比較（n=54）

4) 相手の行動に対する不信感

相手との関係性（相手のことが好き・相手のことが嫌い）において、「相手のしたことを嫌がらせだと思うか」という項目とのWilcoxonの符号付き順位検定を行った。

その結果、有意差が見られ（ $Z=-4.01, p<.01$ ），嫌いな相手に対しての方が、好きな相手に対してより、得点が有意に高いことがわかった（図13）。

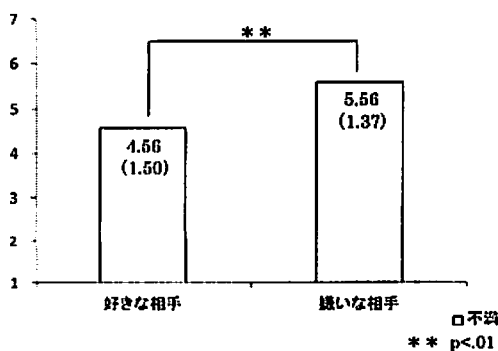


図11 相手との関係性における、相手に抱く感情（不満）の比較（n=54）

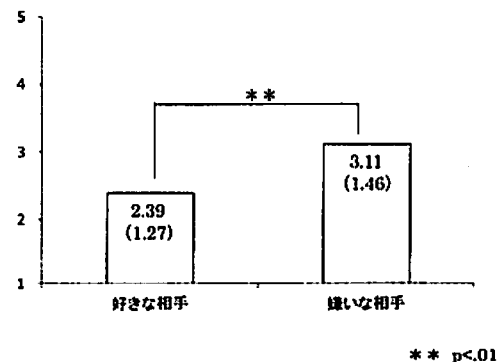


図13 相手との関係性における、相手の行動に対する不信感の比較（n=54）

5) 相手に向ける表情

相手との関係性（相手のことが好き・相手のことが嫌い）によって、相手に向ける表情に違いがあるかどうか、Wilcoxonの符号付き順位検定を行った。その結果、有意差が見られ（ $Z = -4.12, p < .01$ ）、嫌いな相手に対しての方が、好きな相手に対してより、表情が硬くなることがわかった（図14）。

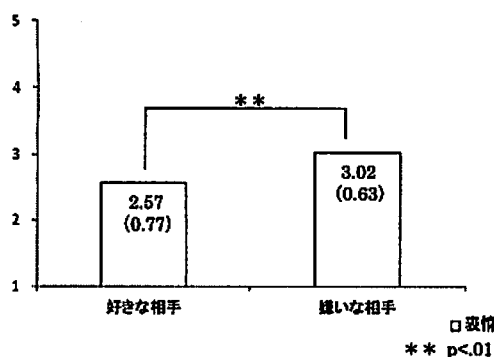


図14 相手との関係性における、相手に向ける表情の比較 (n=54)

6) 相手に対して心の中でどのようなことを思うか

「相手に対し、心の中でどのようなことを思うか」をたずねた吹き出しの回答を、筆者と心理学の専門家、そして20代の社会人の計3名で22個に分類した。

「好きな相手」に対して、最も回答人数が多かったものは、「自分だって行きたくない」というものであり、8名であった。「嫌いな相手」に対してでは7名がこう答えているが、回答人数の順位としては3番目となっている。一方の「嫌いな相手」に対しての回答として1番多かったものは、「相手の身勝手に対していらだつ」であり12名が回答していた。「好きな相手」に対してでは、こう回答したものが2名であり、「好きな相手」に対しての回答と「嫌いな相手」に対しての回答で1番開きが見られた回答内容となった。5名以上の開きがあったものとしては、「相手に1人で行って欲しい」（好きな相手2名、嫌いな相手9名）があった。

5名以上の回答があった項目をそれぞれ挙げてみると、好きな相手に対してでは、「自分だって行きたくない（8名）」「面倒くさい（7名）」「一緒に行きたい（5名）」であったのに対し、嫌いな相手に対してでは、「相手の身勝手に対していらだつ（12名）」「相手に1人で行って欲しい（9名）」「自分だって行きたくない（7名）」「行きたくないと思う（6名）」「面倒くさい（5名）」となっていた。

7) 実際に相手に伝えること

「実際に相手に伝えること」をたずねた吹き出しの回答を、筆者と心理学の専門家、そして20代の社会人の計3名で20個に分類した。

「好きな相手」に対して、最も多かった回答は、「了承する」であり、15名であった。「嫌いな相手」に対しても、「了承する」が一番多い回答内容となっており、こちらは、18名が回答していた。「好きな相手」に対しての回答内容と、「嫌いな相手」に対しての回答内容で、一番開きが見られた項目は「一緒に行こうと誘う」というものであり、「好きな相手」に対してが11名であったのに対し、「嫌いな相手」に対しては、5名となっていた。

5名以上の回答があった項目をそれぞれ挙げてみると、好きな相手に対してでは、「了承する（15名）」「一緒に行こうと誘う（11名）」「何も言わない（6名）」「了承するが、相手に貸しをつくる（5名）」であり、嫌いな相手に対してでは、「了承する（18名）」「何も言わない（8名）」「ジャンケンを提案する（7名）」「一緒に行こうと誘う（5名）」となっていた。

考察

1. 間接的攻撃言動

今回の研究では、間接的攻撃言動を「想像」「露骨」「態度」という3つのパターンに分けることができた。「想像」「露骨」「態度」因子と15項目の総和全てで、好きな相手に対しての方が、特性と嫌いな相手に対してより間接的攻撃言動は少なくなるという結果が得られ、仮説(1)は支持された。

好きな相手に対して間接的攻撃言動が少なくなるのには、好きな相手に対しては、相手に対して好意がある為、関係を配慮し相手の気持ちを考え、なるべく攻撃的にならないように配慮するからではないかと考える。特性と嫌いな相手のときと比べて、相手の気持ちを考え相手が傷つかないように配慮をする分、間接的攻撃も出にくくなるのではないだろうか。

「露骨」因子においては、特性よりも嫌いな相手に対しての方が、間接的攻撃を表出しない傾向にあった。これは、好きな相手に対してと、嫌いな相手に対しての間接的攻撃言動を測るのに、場面想定をしたことが影響しているのではないかと考える。場面を設定したことにより、より理不尽な状況が身近になり、相手に対して自分が攻撃手段をとるとということが想像しやすくなったため、相手に対し露骨な形では間接的攻撃言動を出しにくくなったのではないだろうか。また、今

回の場面状況では「サークルの仲間」が相手であり、サークルをどちらかがやめない限り、今後も顔を合わせ続ける相手である。調査対象が大学2.3年生であり、卒業まではまだ1年以上ある為、今後も相手と顔を合わせ続けるという状況を想像しやすいと考える。またサークル内でおこったトラブルは、そのサークル全体のトラブルに発展する可能性もある。相手に対してだけの今後の付き合い方だけでなくサークル内での自分の立場も考慮に入れ、間接的攻撃とはいえず、露骨に攻撃を表出する方法はとりにくいのではないだろうか。

2. 本音を伝えなかった理由

好きな相手に対しての方が、嫌いな相手に対してよりも、相手との関係を配慮し、相手が傷つかないように表現をとうとうとして本音を伝えなかったという傾向にあった。また、嫌いな相手に対しての方が、好きな相手に対してよりも、相手とのトラブルを避けるために本音を伝えない等、相手と関わることで自分に不利がおよばないようにするために本音を伝えないという傾向にあった。仮説(2)は支持されたと言える。

好きな相手に対してはもともと的好感度や信頼感が高いと推測されるため、嫌いな相手に対してよりも「今後も良い関係を築いていきたい」という考えが湧き易い。その為、今後の人間関係のことも考慮に入れ、相手との関係に配慮をしようとするのではないかと考える。

一方、好きな相手と関わることより、嫌いな相手と関わることによって不快という感情が想起されやすいと推測する。ストレス研究では、強い不快刺激を用いることが多い(高砂,1998)ことから、不快刺激に触れることによりストレスがかかりやすいと言える。そして、紺・相沢(2011)の研究では、対人葛藤場面において、「嫌悪判断・不快」と、自己主張や適応行動等の能動性を測る「積極的行動」の間に高い負の相関が見られ、嫌悪や不快感を覚えるほど、積極的行動がとりにくくなることがわかっている。このことから、「嫌いな相手に、理不尽なことを頼まれ、引き受けなければならない」という強いストレスがかかった際、その強いストレスから自分を守る為に、相手となるべく関わらないようにすることを選びやすいのではないかと考える。梅本(1988)の調査によると、親密性の低い「非友人」よりも、親密性の高い「友人」に対しての方が、気楽になんでも話し合うことができる関係を背景にして、よき理解者や相談相手になってくれる、という認識をしているということが分かっている。

このことから、相手と話し合う時間をとっても相手によき理解者になってくれるという期待が持てないため、退避という手段をとりやすいのではないだろうか。

3. 相手に抱く感情

理不尽なことをされた場合、嫌いな相手にされる方が、好きな相手にされるより、怒りと不満が高くなることがわかり、悲しみに関しては、好きな相手に理不尽なことをされる方が、嫌いな相手に対してされるよりも、悲しみが深くなっていた。仮説(3)の「相手に抱く感情」については部分的に支持されたといえる。

怒りと不満の結果については、相手に対してもともと持っている感情によって、光背効果が起こっているものと考えられる。光背効果とは、心理学辞典(2001)によると、「他者がある側面から望ましい(もしくは望ましくない)特徴をもっていると、その評価を当該人物に対する全体評価にまで広げてしまう傾向」である。この効果により、同じ理不尽な行いをしたとしても、嫌いな相手に対しては、好きな相手に対してより悪く捉える、あるいは、好きな相手に対しては、嫌いな相手に対してよりも良く捉える。その為、怒りと不満に関しては、同じ理不尽なことでも嫌いな相手にされたときの方が、好きな相手にされたときよりも感じやすいのではないかと考える。

好きな相手に対しての方がより悲しみを覚えやすい理由としては、「本音を伝えない理由」の自由記述の「嫌いな人にはなにも期待しないから」という回答にもあるように、好きな相手に対しての方が、信頼が深く、関係期待が高くなるからではないかと考える。梅本(1988)の研究でも、親密度の低い非友人よりも、親密度の高い友人の方が、期待により良く答えてくれる存在であるということが分かっている。また同研究では、友人に対して抱いている期待に対し、相手がどの程度応えてくれるかということが、その友人関係の形成・維持・発展の規定因の一つになっており、期待が応えられる相手との関係は維持・発展させられるが、そうでない相手との関係では、場合によっては関係が解消される可能性があると言われている。このことから、好きな相手に対しては期待を抱きやすく、今まで期待に応じて来てもらったという信頼があると言える。信頼していた相手に理不尽なことをされることにより、裏切られたような思いがして傷つき、悲しみを覚える一方で、嫌いな相手に対しては、信頼感や期待が無い為に、理不尽なことをされても悲しみは覚えやすいのではないだろうか。

4. 相手の行動に対する不信感

理不尽なことをされた場合、嫌いな相手に対しての方が、好きな相手に対してよりも「相手は嫌がらせをしたのだと思う」という考えに繋がりがやすい結果が得られ、仮説(3)の「相手の行動に対する不信感」についての仮説は支持された。

これは前述の光背効果による、嫌いな相手のすることが全て嫌なものに見えやすいことが1つの要因として挙げられると考える。

また、期待に応えてもらってきたという信頼感が嫌いな相手との間では生まれにくい。その為、信頼できない相手に対して猜疑心が湧き、「私への嫌がらせなのではないか」という思考に結びつきやすいのではないかと考える。相澤(2010)の研究によると、攻撃性と対人挑発場面における敵意帰属については有意な正の相関が見られることが分かっている。好きな相手よりも嫌いな相手に対しての方が攻撃性は高くなる為、このことから、相手に対して「嫌がらせをされた」という不信感に繋がりがやすくなると言える。

5. 相手に向ける表情

嫌いな相手に理不尽なことをされた方が、好きな相手にされるより、表情が硬くなることがわかり、仮説(3)の「相手に向ける表情」については支持された。

これは、好きな相手に対しての方が、嫌いな相手に対してより、相手の気持ちを考えて言葉を選ぶという、「(2)相手に本音を伝えなかった理由」の結果からも言えるように、相手がどう思うかを考え、堅い表情をなるべく避けようとするからではないか。また、「(3)相手に抱く感情」でも書いたように、好きな相手に対しての方が腹が立たないために、自然と表情も嫌いな相手に向けるものより柔らかくなるのではないかと考える。

6. 相手に対して心の中で思うことと実際に相手に伝えること

「相手に対して心の中でどのようなことを思うか」については、好きな相手に対しても嫌いな相手に対しても、「行きたくない」という不満が多く見られた。しかし、好きな相手では、「一緒に行きたい」という、自分も行動する上で相手とも同じ行動をして欲しい、という相手への好意も多く見られたが、嫌いな相手に対してでは、「相手の身勝手にいらだつ」という回答や「相手に1人で行って欲しい」という、理不尽な相手に対して同じく理不尽なことを願う回答が多く見

れた。

「相手の身勝手にいらだつ」という項目の回答人数には好きな相手に対してと嫌いな相手に対してでは9名の開きがあり、好きな相手に対しての方がそう回答した者が少ない。これは前述したように、嫌いな相手に対しての方が怒りや不満を感じやすく、苛立ちやすいと考えられる。

「実際に相手に伝えること」については、どちらも「了承する」が1番多い回答になっていた。嫌いな相手に対しての方が、好きな相手に対してよりも回答人数が3名多く、「苛立ち」「1人で行って欲しい」「自分だっ行きたくない」と答えた人数が、好きな相手に対してよりも多いのにも関わらず、素直に了承する人が、好きな相手に対してよりも多くなっていた。一番回答に開きが見られたものが「一緒に行こうと誘う」というもので、好きな相手に対しての方が多く見られた。次に開きが見られたものが「ジャンケンを提案する」であり、こちらは嫌いな相手に対しての方が多く見られた。ただし、「一緒に行こうと誘う」に関しては、好きな相手に比べ少ないとは言え、5名という比較的多くの回答を集めている。また、「何も言わない」もどちらともに5名以上であった。

このことから、好きな相手に対してでは、本音において、相手の理不尽な発言に対し、嫌だという気持ちを持つ者もいるが、相手と行きたいという肯定的な気持ちを感じる者も多い。そして、本音を言えずに了承したり何も言わずに相手に言われたとおりに行動したりすることもあるが、「一緒に行きたい」という肯定的な気持ちを相手に直接伝えることもできると言える。

そして嫌いな相手に対してでは、本音では、相手の身勝手に苛立ち、相手の希望に従うのではなく相手に対しても理不尽なことを望むが、実際には了承したり、何も言わないまま相手の言われたとおりに行動したりしており、本音と実際伝えることに、好きな相手に対してよりも差があった。「1人で行って欲しい」という本音を柔らかく伝える為に、ジャンケンを提案する人も見られるが、「一緒に行こうと誘う」という回答も他の回答に比べて多いことから、本音を直接的な形では伝えるにくいのだと考えた。57名中、本音を伝えられた人が、好きな相手に対してでは15名であったが、嫌いな相手に対してでは10名であり5名の開きが見られることから、嫌いな相手に対しては本音を伝えるにくいことが読み取れる。以上のことにより、仮説(4)は部分的に支持されたと言える。

まとめと今後の展望

今回の研究により、理不尽な場面において、好きな相手に対してよりも嫌いな相手に対しての方が、間接的攻撃言動や負の感情、不信感などが出やすいことが分かった。嫌いな相手に対しての方が、好きな相手に対してよりも、理不尽な状況では、相手に本音を伝えることで自分に不利益が及ぶことを避ける為に、本音を伝えず、また相手の気持ちを考慮し発言を抑えることは好きな相手に対してと比べて少ないことが分かった。しかし、好きな相手に対してよりも、怒りや不満を感じる為、直接的な攻撃ではなく、間接的な攻撃を用いて、本音を自分に不都合が及ばない形で伝えるのではないだろうか。また、人数が少ないことから確信を持っては言えないが、集団状況においては、個としての性格よりも集団の中における自己を大事にし、集団からはみ出さないようにするのはないかと考えた。そして、浅い人間関係においては部分的、一時的にしか付き合わず、相手に投入するエネルギー量が少ないのではないだろうか。これらのことも性格特性による差が出にくい一因であると考えた。

学級全体やグループ内でのいじめでも、集団内で力を持つ者や、何人かの人間が気に入らない1人の相手に対し不満を持ち、でも本音が伝えられずに間接的攻撃をおこない始めると、それが集団規範となってしまう、最初は相手のことを嫌いだと思っていた人でも、集団としてのルールになってしまったことで集団の中ではみ出さないように自分の気持ちを抑えて、集団に従うのではないか。また、自分以外がターゲットになることは、自分がまだ孤立しなくて済むということである為、いじめの被害者に対して間接的攻撃言動をとったり相手を憎んだりすることで、安心感を得ているところもあるのかもしれない。そして嫌いな相手に対しては怒りや不満を感じやすいことから、いじめられている相手が何かアクションをおこしても、それが悪い方向に繋がりがやすく、また嫌いな相手に対しては、自分に不具合が及ばないように思っていることを口では伝えずに、敵意や相手の不満が分かりにくい形で伝わる間接的攻撃を用いるので、本人がどうしていじめられているのか分からない上に対処の仕様がないうという、八方塞がりの状況になりやすいと言える。

今回の研究では、間接的攻撃言動の表出と相手に対して抱く感情については理解されたが、表出に向かうプロセスについては十分に検討ができていない。間接的攻撃言動がなぜ起こるのかを正確に知るためにも、本研究での基礎的理解をもとに、間接的攻撃言動表出

の過程についてさらに詳しく検討していく必要があると考える。また、間接的攻撃言動尺度精選も必要である。

文献

- 相澤 直樹 (2010). 対人葛藤場面における他者の意図の判断と情緒反応について一場面想定法による敵意帰属と嫌悪判断の測定とその妥当性一. 日本パーソナリティ心理学大会発表論文集 19, pp.102.
- ベネッセ教育研究開発センター (2009). 第2回子ども生活実態基本調査 第2章第2節 メディアとの接触 pp.78-91. (http://benesse.jp/berd/center/open/report/kodomoseikatu_data/2009/pdf/data_07.pdf)
- 梶一士 (1990). 敵意的攻撃インベントリーの作成. 心理学研究, 61(4), 227-234.
- 板倉 陽一郎 (2006). インターネット上における「意図せぬ公人化」を巡る問題. 情報処理学会研究報告. EIP, [電子化知的財産・社会基盤], 128, 9-14.
- 井出 明 (2006). サイバーストーカー (ネットストーカー) の現状と対応. 情報処理学会研究報告 96, 115-120.
- 勝間 理沙・山崎 勝之 (2008). 児童の関係性攻撃における自己評定と仲間評定の比較. 心理学研究, 79(3), 263-268.
- 紺 真理・相澤 直樹 (2011). 青年期における攻撃性について一第二の個体化過程と対人葛藤場面における他者の意図の判断から一. 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 5(1), 9-18.
- 牧野 幸志 (2012). 青年期におけるコミュニケーション・スキルと友人関係一同性・異性友人に対するコミュニケーション・スキルの性差, 学年差の検討一. 経営情報研究, 20(1), 17-32.
- 文部科学省 (2008). 「ネット上のいじめ」に関する対応マニュアル・事例集 (学校・教員) (http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/20/11/08111701/001.pdf)
- 文部科学省 初等中等教育局児童生徒課 (2012). 平成22年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」について (http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/24/02/_icsFiles/afieldfile/2012/02/06/1315950_01.pdf)
- 中村 真 (1991). 情動コミュニケーションにおける表示・解読規則一概念的検討と日米比較調査一. 大阪大学人間科学部紀要 17, 115-145.

相手との関係性から捉えた間接的攻撃言動表出と心情

- 中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁樫算男・立花政夫・箱田裕司(編)(2001). 心理学辞典(初版第3刷). 有斐閣.
- 大石 千歳 (2011). 運動部場面と友人関係場面の「空気の読めなさ」の比較研究—社会的スキルおよび個人・社会志向性との関連をふまえて—. 東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要, 46, 75-85.
- 小田部 貴子・加藤 和生(2007). いじめにおける間接的・直接的攻撃の性差: 攻撃被害と傷つき程度に注目して. 日本教育心理学会総会発表論文集, 49, pp. 350.
- 白井 利明 (2006). 現代青年のコミュニケーションからみた友人関係の特徴—変容確認法の開発に関する研究(Ⅲ)一. 大阪教育大学紀要, 54 (2), 151-171
- 総務省 情報通信政策研究所(2009). ブログの実態に関する調査研究～ブログコンテンツ量の推計とブログの開設要因等の分析～. (<http://www.soumu.iicp/chousakenkyu/data/research/survey/telecom/2009/2009-02.pdf>)
- 高砂 美樹 (1998). ストレス誘発性グルーミング研究の動向. 山野研究紀要, 6, 19-25.
- 梅本 信章 (1988). 友人への期待と現実の友人についての一考察. 日本教育心理学会総会発表論文集, 30, pp. 514-515.
- 山岸 明子 (1990). 第2章 青年の人格発達. 無藤 隆・高橋恵子・田島 信元(編) 発達心理学入門Ⅱ 青年・成人・老人. 東京大学出版会. pp. 11-30.
- 吉岡 和子・高橋 紀子(編)(2010). 大学生の友人関係論 友だちづくりのヒント. ナカニシヤ出版.
- 渡部 玲二郎 (1993). 児童における対人交渉方略の発達—社会的情報処理と対人交渉方略の関連性—. 教育心理学研究, 41 (4), 452-461.